

部活動での事例

～ケガをした部員 A との選択肢を与えた関わりについて～

山本卓也・中島弘徳 (岡山)

要旨 : 私たちは、「Passage」の子育ての心理面の目標である「私には能力がある」「人々は仲間だ」を常に意識しながら部活動での「勇気づけ」の対応について検討をしてきた。

今回は、選手としての大きな決断をしなければならない場面に立たされた生徒との関わりで、アドラー心理学の「選択肢を与える」対応をした結果、生徒自身が自分の可能性に気づき、前向きに練習に取り組めるようになり、さらにチームへの所属感を得ることができた事例について報告する。

キーワード : アドラー心理学、教育、学校、部活動、勇気づけ

A case report of club activity : Giving choices as an encouragement.

We have tried to “encourage” students in the club activities. We were always conscious of psychological goals of Passage. In this paper, we will report about students who must make a big decision as a player. We gave choices to the student as an encouragement. As a result, the student noticed his ability and has begun his activities.

Key words : Adlerian psychology, education, school, encouragement, club activities

1. はじめに

私たちは、「部活動における勇気づけ」^[1]で、『Passage』の子育ての心理面の目標である「私には能力がある」「人々は仲間だ」を常に意識しながらバッティングの調子を崩した生徒への「勇気づけ」の対応について報告しました。その後も、私たちは、部活動でのアドラー心理学に基づく「勇気づけ」の対応について検討をしてきました。

今回は、選手としての大きな決断をしなければならない場面に立たされた生徒との関わりで、アドラー心理学の「選択肢を与える」対応をしました。「選択肢を与える」ことについて野田が「レイモンド・コーシーニ(Corsini,R.)は、『学校教育では、いかなる時間にも複数の選択肢があつて、そこから子どもたちが選択するのでなければ失敗する。選択の余地のない時間がたとえ一時限でもあつてはならない』^[2]と語ったとしているように学校教育でも重要な対応と考えられます。なぜなら、アドラー心理学は、ドライカース(Dreikurs,R.)が言うように、「わたしたちは、自分で決めたことのみをおこなう (“We all do only what we decide.”)^[3]し、ディンクマイヤー(Dinkmeyer,D.)とドライカースが述べているように「人間はもともと自発的であり、かなり自由

に自分の行動を自分で決められる」^[4]と考えているからです。

以下で「選択肢を与える」対応をした結果、生徒自身が自分の可能性に気づき、前向きに練習に取り組めるようになり、さらにチームへの所属感を得ることができた事例について報告します（なお、対象生徒はAとします。本人、保護者からの了解は得ています。報告の事例については終結しています）。

2. 部活動について

私たちが部活動について検討しているのは、アドラー心理学をすると競争しなくなるので勝てなくなるのではないかという指摘が学校関係者から聞かれたからです。モザック（Mosak,H.H.）とマニアッチ（Maniachi,M.P.）は、アドラー派は、「社会や共同体の有用で生産的なメンバーとなるように導きたいと望」^[5]むので、アドラー心理学の心理面の目標を意識して実践することで、協力原理に基づいた人になりながらも、有用な競技者を育てることが可能ではないかと考えたからです。そのため、部活動で生徒を指導する場面で、行動面として生徒一人ひとりが「自立する」「社会と調和して暮らせる」ように、心理面では「自分には能力がある」「人々は私の仲間だ」と思えることができるようになることを念頭に置いて指導をし、社会と調和する中で生徒それぞれの個性に合わせた教育ができるよう取り組んでいます。

また、中学校の部活動はあくまでも教育活動であるので「野球を教える」のではなく「野球を通じて人間関係や主体的に物事に取り組んでいくことを教える」というスタンスで指導を行っています。その中で、時にはつらい、ハードな練習を一人ひとりが、互いを尊重しチームメイトと手を携えて乗り越えていくことで、勝つことが目的ではなく、意味のある試合をしようという雰囲気が強くなります。その結果として勝つことも多くなることがわかりますが、負けた時に悔しさも共有し成長できています。

3. 実践事例

(1)背景

4月初旬、新しい学校へ赴任し野球部の顧問を担当することになった。前顧問からの申し送りで2年生の昨年冬にケガで右肘を手術したが、術後の経過が思わしくなく、最近になって病院を変わり再手術を受けプレートで固定をしているAという生徒がいることを聞いた。8月頃にはプレートを外す手術をする予定であるが、今後ボールを投げたりすることは難しいかも知れないということであった。Aは野球が非常に好きで、練習が全くできない現在も、グラウンドに来て練習を見学しているということであった。

申し送りを受けて以下のようなことを考えた。

「好きな野球ができないということで落ち込んだり、ストレスを感じているのではないか。ただこれは想像でしかなく、Aと顔を合わせて直接話をしたわけではないので安易な先入観を持つことはやめよう。本人と直接話をしながら、Aへの理解を深めていこう。そして本人が『野球をやりたい』と心から望んでいるのであれば、その気持ちに応え、彼が取り組めるものを一緒に探していけるよう援助していこう。」

(2) Aとの関わり

< 4月中旬 >

《場面1》

部活動が正式にスタートした。Aは制服を着て、右腕は固定し三角巾で吊った状態でグラウンドに来ていた。様子を見てみると、チームの練習の邪魔にならないように、グラウンドの隅のほうで練習を見学していた。翌日も同じ様子であった。私の方はこの2日間は特にこちらから何か話しかけていくということなく、様子を見るのみであった。この様子から以下のように考えた。

「非常におとなしい生徒だな。チーム内に話し相手はいるようで安心した。練習中ずっと隅で見学をしていたことから、Aはチーム内での自分の役割、居場所を見つけられていないようだ。これからの関わりとして、まずAとの人間関係を築き、情報収集をしていく中で、Aの考えや現在の心境などを聴けるようにしていこう。」

《場面2》

練習中、ノックを打つ機会があり、Aに“球出し（ノックを打つ人にボールを手渡す）”をお願いする。ノック後、時間ができたのでAと話をする。以下はそのときのAとの会話である。

私：「ありがとう、助かったよ」

A：「はい。」（非常に小さな声）

私：「ところで、右腕はいつごろから吊っているの？」

A：「・・・（沈黙）。」

私：「最近？」

A「いえ。」（非常に小さな声）

私：「じゃあ、1年生の冬ごろ？ 秋ごろ？ 夏ごろ？」

A：「秋か冬ごろです。」（非常に小さな声）

私：「そうか、実はS先生から少しは聞いていたんだけど、手術したの？」

A：「はい。」（小さな声）

私：「病院の先生はいつごろ治るって言ってた？」

A：「夏ごろです。」（小さな声）

私：「確か、ボルトを入れてるんだよね？」

A：「はい。」（小さな声）

私：「そのボルトが夏ごろ取れると？」

A：「はい。」（小さな声）

私：「じゃあ、後3ヶ月くらいの辛抱だね。」

A：「はい。」（浮かない表情）

この会話から以下のようなことを考えた。

「本人と話せてよかったが、最後に浮かない表情になったのは、私の投げかけた『あと3ヶ月くらいの辛抱だね』という言葉に対して何らかのマイナス感情（悲しみ・怒り・苦しみなど）が出た可能性が高い。だとするならば、Aは恐らく今の自分の置かれている状況に満足や納得はしていないだろう。今度はそのあたりのAの野球に対する気持ちを聞けるよう話を進めてみよう。次回はもう少しふみ込んだ話（本人がどうしたいのかなど）をしてみよう」

《場面3》

部活動中、Aとの会話。

私：「この前の話の続きなんだけど、病院の先生からは夏ごろプレートが取れるとしても右手で投げることは難しいって言われてるの？」

A：「はい。」（非常に小さな声）

私：「そのあたりをもう少し詳しく教えてくれる？ 病院の先生は右ひじのことを何て言っているの？」

A：「手術したんだけど、骨のくっつき方が変になったみたいで、先生も何でこうなったか分からないと言ってます。」（小さな声）

私：「そうなんだ。手術の後、お医者さんでも分からないような複雑なことになっているんだね？」

A：「はい。」（小さな声）

私：「でも、病院の先生でも分からないって言っているのなら、Aくんにとってはなおさら何が何だか分からないよね？」

A：「はい。」（小さな声）

私：「今の状況からどうなっていきたいっていう思いはある？」

A：「投げられるようになりたいです。」

私：「それは野球がしたいってこと？」

A：「はい。」（少し涙ぐむ）

私：「野球、好きなんだね。」

A：「はい。」（はっきりと頷く）

私：「分かった、じゃあこれからAくんが好きな野球を続けられるように、関わっていけるように先生も考えるから、一緒にいい方法を探していこう。」

A：「はい。」

今回の関わりを通して考えたのは、「Aは本当に野球が好きなんだなあ。Aが自分の思いを自分の力で遂げるよう『勇気づけ』たいと考えた。Aはケガをしてもなお野球への情熱を失うことなく、何とか部活動へ参加したいと思っているがその方法が分からず、そのためにAは『自分の力ではこの困難を乗り切れそうにない』というような低い自己評価をしている可能性がある。Aに『自分は能力がある』と思ってもらえるよう援助、勇気づけをしていかなければならない。特に、Aに自分で進む道を自分で決められるように援助することにより、Aに『大事な選択を自分でしっかりとした』という自信をもたせたい」ということであった。

そのために、「私が援助・指導できること、できないことを区別する（課題の分離）する、生徒が自分なりにやっていくことを認め、そのために必要な指導や情報提供をする、そして、こちらから必要以上にAの要求を察して動き過ぎないように留意して取組んでいこう」と考えた。

Aの選択肢を考えてみると、

(1) 野球を続ける。

(2) 退部する、または現状でできる他のスポーツ（運動部）へ転向する。

の2つを考えたが、(2)の選択肢は彼とのこれまでの会話や行動からこの時点では考えなかった。

Aが(1)の野球を続ける決断をした場合、Aの現在の状況から合理的で本人も納得できる選択肢は3つあるように思えた。それは、

①このまま見学を続け、プレートが外れた後、右手で投げることができるようになることを期待して待つ。

②マネージャーやスコアラー（記録係）というチームの縁の下の力持ち的なポジションに就かせてチームに貢献させる。

③右投げから左投げに変更する。

という3つの選択肢である。

ただ、③の「左投げへの転向」という選択はAにとっては非常に重大な決断になるだろう。ボールを投げるといふ動作は「右がダメだから左で」といふような簡単なものではなく、大変な努力と時間と根気が必要になる。また①の選択はAにとっては現状維持であり、プレートが外れてもどうなるか分からないという不安とも付き合っていくことになる。それもまたその辺りをしっかりと説明してAに提案してみよう。またAが望む形ではないかも知れないが、②のマネジャーやスコアラー（記録係）の形でチームにかかわっていくという選択肢もある。次回はその辺りのところをAに提案してみよう。

上記の左投げへの転向については、私自身も指導経験がなく、取り組むことになった際の科学的根拠、専門家の意見の後押し、裏付けが必要だと考えたため、野球を専門にしているトレーナーやスポーツドクターなどにメールや実際に行き行って意見を聞いたところ、両者とも「間に合わないことはないだろう。」ということであった。

<4月下旬>

Aを呼んで話をする。以下はそのときの会話。

私：「Aくんが野球をしたいという思いにどう答えたらいいか、先生なりに色々考えてみたんだけど。Aくんは何か考えてみた？」

A：「・・・(沈黙)」

私：「じゃあ、先生が考えたことを話すよ。前のAくんの話だと、プレートが外れても右腕で投げることはかなり難しいと思うんだ。それで提案なんだけど、このままプレートが外れるまで待って、右腕の回復に期待するか、マネジャーかスコアラーになってチームの支え役としてやっていくか、思い切って左投げの練習をするか、どれかに決めるっていうのはどうかな？」(選択肢の提示)

A：「・・・！」(ハッとした表情でこちらを見る)

私：「もちろんこれは先生の提案だから無理にとは言わないよ。マネジャーをやるといっても野球をやるっていうこととは少し意味合いが違ってくると思うし、左投げに変えるっていうのも『はい、そうですか。』といってすぐできるものでもなくて、大変な時間と労力が必要になると思うから。これまで通りっていう選択でもいいと思うよ。」

A：「・・・(こちらをじっと見ている)」

私：「いきなりで少し驚いたかな？ じゃあ、いきなりついでに試しにそこのネットに左手でボールを投げてみてくれない？」

A：「はい。」

(この後、Aに10球ほど左投げで投球してもらった。私が想像していたよりもはるかにきれいな投球フォームで腕の使い方も初めて左で投げたとは思えないほどだった。この時点で私は“左投げに転向しても十分やれそうだな”と思ったが、ここではAには伝えなかった。なぜなら、実際にはまだ何も始まっておらず、ここで自分の感覚に頼った無責任な励ましは、この先Aの勇気をくじいてしまう可能性があると思ったからである。)

私：「特に左投げへの転向はAくんにとってすごく重要な決断だと思うから、家の人や病院の先生ともよく話を決めてくれたらいいよ。もちろん先生が提案したこと以外で何かいい案があればそれでもいいと思うから。それらを踏まえて5月のゴールデンウィークの後にも答えを聞かせてくれる？」

A：「はい。」(少し笑みが見えた)

この関わりの後の2週間は、「彼が出す決断に沿うかたちで援助していこう。試しに投げた感

じではもし左投げをやると言ってもやっていけそう。もし他の2つの答えを出しても、ゆっくりAの話聞きながら援助できるよう取り組んでいこう。Aに自分の進む道を自分で決めてもらい「自分は能力がある」と思ってもらうために、Aにこれからどうするのかをまず自分で決めてもらおう。ここで私がむやみにAの決断に介入しないほうがよいだろう。」と思いながら過ごした。

<5月初旬（ゴールデンウィーク明け）>

Aに答えを聞くと「左投げに挑戦します」ということであつた。これまでと比べて非常にスッキリとした表情で、時折笑みを浮かべながら話をしたので、この決断を指示していく形で動き出した。

<5月中旬>

いよいよ本格的に左投げへの挑戦が始まる。この段階では練習といってもまず左手でボールを投げることに慣れる作業になる。そこでAに対して「まず左手で投げることに慣れないといけないこと」「慣れるためには細かい動きというよりも投げる動作を繰り返し練習しないといけないこと」「そのためには、辛抱強く繰り返しネット投げ（練習の1つ）を続けられないといけないこと」を説明した。Aは「はい」と答え、それから約1ヵ月半、黙々と5m先のネットにボールを投げ続けた。全投球数は3,000球を超えた。このAのひたむきな姿に感動を覚えた。また、単調な練習をひたすらこなすAのエネルギー、パワーに感心した。Aのこの姿はチームにも何かしら良い影響を及ぼすのではないかと考えた。

<7月上旬>

Aが左投げ用のグラブを購入したので、他の部員とキャッチボールをさせてみた。「10mまではなんとか届いて欲しい」と思って見ていたが、Aの投げるボールはベース間の少し手前（約25m）の所まではゆうに届いていた。「練習の賜物だね」と言うと「はい」と照れくさそうに返事をした。また、チームメイトの中にもAのキャッチボール相手をすすんでかっけてくれる者も出てきた。Aのひたむきな姿に感化される生徒が出てきたようであつた。決して運動神経は良い方だとは思えなかったAだったが、とても初めてだとは思えないほどの綺麗な投球フォームをしていたことに驚嘆した。改めて生徒の持つ可能性をAに見せてもらった気がして、大変うれしく思った。また、チーム内にもAをサポートしていこうとする動きを見せる生徒が見えて非常にうれしかった。同時に他のチームメイトに対して感謝の気持ちでいっぱいになった。これからは様子を見ながらAの到達度にに応じて少しずつやれることを増やしていこう。チームは彼を受入れる雰囲気ができつつある。この雰囲気を大事にしながらAがチームに所属感を感じられるように援助していこう。

7月に入り、プレートを外す手術の予定が冬まで延長されたことをA本人から聞く。しかし、すでにAは自分のやるべきことを見つけ、目標に向けて努力を始めており、手術の延期が決まった後も私が「慌てずじっくりトレーニングを積むための時間にしよう」と呼びかけたところ「はい」としっかりとした口調で答えていた。また、チーム内や保護者の中にもAを心から応援し、尊敬する雰囲気も出てきており、Aの存在がチームの内や外へ好影響を与えつつある。チームに所属感を感じ、自分の能力に自信が持てたであろうこの頃から、それまでになかったような大きな声を出して他のチームメイトとランニングする様子が窺えるようになった。練習にも自分が出発することを見つけ参加するようになった。夏休みの練習最終日、チームメイトに改めてAの手術が延びたことを伝えた。その後チームメイトからは「がんばろう。ここまでがんばってきたんだ

し！」などの励ましの言葉が聞こえていた。チームメイトからもAは認められ、チーム内にもAの居場所はあるのだと確認できた瞬間であった。そして1か月後の3年生最後の市の大会でその年のチームは見事優勝を飾った。

4. 今回の事例をふりかえって

今回の事例に取り組むにあたり、Aの状況を冷静に見極め、取り組み可能な選択肢を提示することで勇気づけていこうと考えました。これは、前述したように「野球を教える」のではなく「野球で教える・勇気づける」というスタンス、「自分の人生は自分で歩いていかなければならないし、自分で決めることができる」というメッセージを伝えるためでした。

また、担任や前顧問などからの申し送りを受ける中で、私のこの思い（「自分の人生は自分で歩いていかなければならないし、自分で決めることができる」というメッセージを伝えたいという思い）について担任や前顧問などと共有することを心がけました。これは、教育現場でアドラー心理学を実践するためには、私自身のアドラー心理学に基づく指導方針を理解してもらう努力が不可欠だと思うからです。

Aへの「選択肢を与える」対応については、ネルセン（Jane Nelsen）も、子どもの教育に際し「いつでも必要に応じて、子どもに最低2つの受け入れることが可能な選択肢を与える必要がある」^[6]としていることから2つ以上の選択肢を考えました。さらに、選択肢を与えるにあたっては、野田がいくつかの条件をあげていますが、特に本事例の場合は、「1. 子どもが複数の代替案から自由に選択できること。2. 子どもの行為と結末との間に必然的な関係があること」^[7]という条件が整うことに留意しました。さらに選択肢を与えるに際して、鎌田が「アドラー心理学にもとづくクラス運営をする上で、留意すべき点の第1は、担任がアドラー心理学が提示する目標を明確に意識することです。次には、解決構成的アプローチ、全体へのアプローチ、横の関係といったものがあげられます」^[8]と述べているように選択肢を与える目標を意識しつつ原因除去的な選択肢を与えなかったことと、生徒Aの成長だけでなく、部員全体により影響をもたらせるように心がけました。これらが、今回の事例で効を奏したと考えられます。

さらに、一度選択肢を与え選択してもらった後、手術の延期が決まった時点でも、新たな選択肢を与えずに方向を変えなかったことが、Aの選択を尊重することとなり、勇気づけとなったこともよかったのではないかと考えます。

5. おわりに

今後も、教育現場でのアドラー心理学の実践について検討をしていきたいと思えます。最後になりましたが、事例を報告する許可をくださったA君や保護者の方に感謝します。

6. 文献

- [1] 山本卓也, 中島弘徳: 部活動における勇気づけ. アドレリアン 24(1):p32-36,2010
- [2] 野田俊作: 選択できない可能性. アドレリアン 33(2):p67,2000
- [3] Theo,S.and Dreikurs Ferguson,E.:Dreikurs Sayings. ambridge,England:ICASSI,p21,2000.

- [4] ディンクマイヤー D., ドレイカース R.: 子どものやる気 . 創元社 ,1975.p13
- [5] モザック H.H., マニアッチ ,M.P.: 現代に生きるアドラー心理学 - 分析的認知行動心理学を学ぶ -. 一光社 ,2006.p271
- [6] Nelsen,J.,Lott,L.,and Glenn,S.H.Positive Discipline A → Z, Prima Publishing CA.p9,1993.
- [7] 野田俊作 : 論理的結末 . アドレリアン 12(1):p6,1993
- [8] 鎌田穰 : 遊び心をもった楽しいクラス運営 (総論) . アドレリアン 21(2):p96,1996

参考文献

- 1) 野田俊作 : 助言の方法 . アドレリアン 1(2):p69-77,1985
- 2) 岸見一郎 (訳) : 学校における個人心理学(1) . アドレリアン 5(2):p115-120,1992
- 3) 萩昌子 : クラスの中に治療的人間関係を . アドレリアン 3(1):p17-27,1989
- 4) 野田俊作・萩昌子 : クラスはよみがえる , 創元社 ,1989

更新履歴

2019年8月20日 アドレリアン掲載号より転載